

日蓮大聖人御書全集

こうにちしようにんごへんじ

光日上人御返事

新版
1264
ゝ
1267

光日上人御返事

弘安 4 年 ('81) 8 月 8 日 60 歳 光日尼

法華經二の卷に云わく「その人は命終して、阿鼻獄に入

らん」云々。阿鼻地獄と申すは天竺の言、唐土・日本には

無間と申す。無間はひまなしとかけり。一百三十六の地獄

の中に、一百三十五はひま候。十二時の中に、あつけれ

ども、またすずしきこともあり。たえがたけれども、また

ゆるくなる時もあり。この無間地獄と申すは、十二時に、

一時かた時も大苦ならざることとはなし。故に、無間地獄と申

じごく

われ

い

そうろうだい

そこにまんゆじゆん

す。この地獄は、この我らが居て候 大地の底二万由旬を

さいげ ところ

せけん ほう

軽 もの

すぎて、最下の処なり。これ、世間の法にも、かるき物は

うえ おも もの した

だいち うえ みず

ち みず

上に、重き物は下にあり。大地の上には水あり。地よりも水

みず うえ

ひ

みず

ひ

ひ うえ

かぜ

かるし。水の上には火あり。水よりも火かるし。火の上に風

ひ

かぜ

かぜ うえ くう

かぜ

くう

あり。火よりも風かるし。風の上に空あり。風よりも空か

ひと

しだい

つく

あくにん

かぜ

ひ

ろし。人をもこの四大をもつて造れり。悪人は、風と火と

さ ち みず とど

ゆえ

ひとし

のちおも

じごく

まず去り、地と水と留まる。故に、人死して後重きは、地獄

お そう

ぜんにん

ち みず

さ

かぜ

ひとど

へ墮つる相なり。善人は、地と水とまず去り、風・火留ま

おも もの さ

かる

もの とど

ゆえ

かる

にんてん

う

る。重き物は去りぬ。軽き物は留まる。故に軽し。人天へ生

まるる相なり。そう

地獄の相、重きが中の重きは無間地獄の相なり。か じごく そう おも なか おも むけん じごく そう 彼の無間

地獄は縦横二万由旬なり。か じごく じゅうおうにまんゆじゅん はつぽう はちまんゆじゅん 八方は八万由旬なり。彼の地獄

に墮つる人々は、一人の身、大にして八万由旬なり。多人もお ひとびと いちにん み だい はちまんゆじゅん たにん

また、かくのごとし。身のやわらかなること、綿のごとし。み 柔 わた

火のこわきことは、大風の焼亡のごとし、鉄の火のごとひ 強 おおかせ しょうもう くろがね ひ

し。詮を取つて申さば、我が身より火の出ずること十三あせん と もう わ み ひ い じゅうさん

り。二つの火あり。足より出でて頂をとおる。また二つふた ひ あし い いただき 通 ふた

の火あり。頂より出でて足をとおる。また二つの火あり。ひ いただき あし ふた ひ

背せより入いつて胸むねより出いず。また二ふたつの火ひあり。胸むねより入いつ

て背せへ出いず。また二ふたつの火ひあり。左ひだりの脇わきより入いつて右みぎの脇わき

へ出いず。また二ふたつの火ひあり。右みぎの脇わきより入いつて左ひだりの脇わきへ出い

ず。また一ひとつの火ひあり。首くびより下したに向むかつて雲くもの山やまを巻まく

がごとくして下くだる。この地獄じごくの罪人ざいにんの身みは、枯かれたる草くさを焼や

くがごとし。東西南北とうざいなんぼくに走はしれども、逃にげ去さる所ところなし。他たの

苦くはしばらくこれをおお置く。大火たいかの一いつ苦くなり。この大地獄だいじごくの

大苦だいくを仏ほとけ委くわしく説とき給たまうならば、我われら衆生しゅじょう、聞きいて皆死みなしす

べし。故ゆえに、仏ほとけ委くわしくは説とき給たまうことなしと見みえて候そうろう。

いま にほんこく しじゅうごおくはちまんくせんろつぴやくごじゅうはちにん ひとびと

今、日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人々は、

みな じごく お たも いちにん お

皆この地獄へ堕ちさせ給うべし。されども、一人として墮つ

思 れい こうあんしねんごがついぜん

べしとはおぼさず。例せば、この弘安四年五月以前には、

にほん じょうげばんにん いちにん もうこ せ 値 思

日本の上下万人、一人も蒙古の責めにあうべしともおぼさ

にほんこく にちれんいちにん こと

ざりしを、日本国にただ日蓮一人ばかり、かかる事この国に

しゅつたい 知 とき にほんこく しじゅうごおくはちまんくせん

出来すべしとする。その時、「日本国の四十五億八万九千

ろつぴやくごじゅうはちにん いっさいしゅじょう いちにん たこく せ

六百五十八人の一切衆生、一人もなく他国に責められさ

たま だい ぐ 焙 烙 もう かま みず い

せ給いて、その大苦は、譬えばほうろくと申す釜に水を入れ

雑 魚 もう ござかな 数 多い か 柴 き 焚

て、ざつこと申す小魚をあまた入れて、枯れたるしば木をた

もう

恐

忌

々

かんがごとくなるべし」と申せば、「あらおそろし、いまいま

う

張

ところ

お

なが

ころ

しん

ひとびと

し。打ちはれ、所を追え、流せ、殺せ。信ぜん人々をば、

でん 畠

取

たから

うば

しよりよう

召

もう

田ばたをとれ、財を奪え、所領をめせ」と申せしかども、

ごがつ

だいもうこ

せ

あ

呆

まよ

この五月よりは大蒙古の責めに値つてあきれ迷うほどに、

おも

ひとびと

苦

々

責

さもやと思う人々もあるやらん。にがにがしゅうしてせめ

あ

こと

当

たくはなけれども、有る事なれば、あたりたりあたりたり、

にちれん

もう

こと

化

もの

もう

日蓮が申せし事はあたりたり、ばけ物のもの申すようにこ

そうら

い

じようきゆう

かつせん

おきのほうおう

おんまえ

そ候めれ。去ぬる承久の合戦に、隠岐法皇の御前にして、

きよう

に いどの

もう

なに

にようぼうとう

あつ

京の二位殿なんどと申せし何もしらぬ女房等の集まつて、

おう　すす　たてまつ　いくさ　お　よしとき　せ　慌　たま
王を勧め奉り戦を起こして、義時に責められあわて給い

しがごとし。

いまいまごろん

ほけきようひぼう

とが

にちれん

卑

今々御覧ぜよ。法華経誹謗の科といい、日蓮をいやしみ

ぼち

もう

きよう

ほとけ

そう

さんぼうひぼう

たいか

し罰と申し、経と仏と僧との三宝誹謗の大科によつて、

げんしよう

くに

しゅらどう

うつ

ごしよう

むけんじごく

い

現生にはこの国に修羅道を移し、後生には無間地獄へ行き

たも

給うべし。これまたひとえに、弘法・慈覚・智証等の三大師

ほけきようひぼう

とが

だるま

ぜんどう

りつそうとう

いちじようひぼう

とが

の法華経誹謗の科と、達磨・善導・律僧等の一乗誹謗の科

ひとびと

けつこう

たも

こくしゆ

とが

くに

おも

と、これらの人々を結構せさせ給う国主の科と、国を思い

しようじよ

しの

か

かんが

つ

しめ

もち

かえ

あだ

生処を忍んで兼ねて勘え告げ示すを用いずして還つて怨

をなす大科、先例を思えば、呉王・夫差の伍子胥が諫めを用

たいか　せんれい　おも　ごおう　ふさ　ごししよ　いさ　もち
えつおう　こうせん　滅　いん　ちゅうおう　ひかん　ことば

いずして越王・勾踐にほろぼされ、殷の紂王が比干が言を

侮　しゅう　ぶおう　せ

あなずりて周の武王に責められしがごとし。

こうにちあまごせん　しゆくじゅう　ほけきよう

しかるに、光日尼御前は、いかなる宿習にて法華経を

ごしんよう　こやしろうどの　しん　そうら

ば御信用ありけるぞ。また故弥四郎殿が信じて候いしかば、

こ　すす　くどくむな　こ　りようぜん

子の勧めか。この功德空しからざれば、子とともに靈山

じようど　まい　あ　たま　うたが　おりよう

浄土へ参り合わせ給わんこと、疑いなるべし。烏竜とい

もの　ほけきよう　ぼう　じごく　お　こ

いし者は、法華経を謗じて地獄に堕ちたりしかども、その子

いりゆう　もの　ほけきよう　か　くよう　おや　ほとけ

に遺竜といひし者、法華経を書いて供養せしかば、親、仏

な

みようしようごんのう

あくおう

みこ

に成りぬ。また妙莊嚴王は悪王なりしかども、御子の

じようぞう

じようげん

みちび

しやらじゅおうぶつ

な

たも

浄蔵・浄眼に導かれて、娑羅樹王仏と成らせ給う。その

ゆえ

こ

にく

はは

にく

はは

ほね

こ

ほね

まつさか

かしわ

故は、子の肉は母の肉、母の骨は子の骨なり。松栄うれば柏

よろこ

し 枯

らん 泣

こころな

そうもく

とも

よろこ

とも

悦ぶ。芝かるれば蘭なく。情無き草木すら、友の喜び友

なげ

ひと

おや

こ

ちぎ

たいない

の歎き一つなり。いかにいわんや、親と子との契り、胎内に

やど

ここのつき

へ

う

お

すうねん

やしな

かれ

担

宿して九月を経て生み落とす、数年まで養いき。彼にな

かれ

弔

おも

かれ

弔

恨

われ、彼にとぶらわれんと思ひしに、彼をとぶらううらめ

のち

おも

心

苦

しき、後いかながあらんと思うこころぐるしき、いかにせ

こ

おも

きんちよう

ひ

なか

い

こ

ん、いかにせん。子を思う金鳥は火の中に入りなき。子を

おも ひんによ ごうが しず か きんちよう いま みろくぼさつ

思ひし貧女は恒河に沈みき。彼の金鳥は今の弥勒菩薩なり。

か かわ しず によにん だいぼんてんのう う たま

彼の河に沈みし女人は大梵天王と生まれ給えり。いかにい

いま こうにちしようにん こ おも ほけきよう ぎようじや

わんや、今の光日上人は子を思うあまりに法華經の行者

な たも はは こ りようぜんじようど まい たも

と成り給う。母と子と、ともに靈山淨土へ参り給うべし。

とき ごたいめん 嬉

その時、御対面いかにうれしかるべき、いかにうれしかる

べき。

はちがつようか にちれん かおう

八月八日 日蓮 花押

こうにちしようにんごへんじ

光日上人御返事